

放送人の会

会報 NO 10
発行 2002年1月26日

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館3階
Tel& fax 03-3221-0019
E-mail hosojin@abeam.ocn.ne.jp

代表幹事 大山勝美

第一回「放送人グランプリ」候補者ノミネート始まる

前号、前々号でもお伝えした第一回「放送人グランプリ」の候補者ノミネートが、いよいよ今月下旬から開始されます。十二月十七日の広尾で拡大幹事会で決められたことを含めノミネート要領をあらためてお知らせします。

＜1＞賞の対象は、昨年四月から今年三月までの一年間に、放送界で最も顕著な活動をした個人（またはグループ）にグランプリが贈られます。

テレビ、ラジオ（WEB放送など新しい分野を含む）の分野で番組制作、放送関連活動、研究評論など、あるいは中央、地方、組織の内外など仕事のかたちを問いません。もちろん、候補者は会員に限られません。

また、奨励賞、特別賞など若干（二ないし三）の個人またはグループへ同じ趣旨で贈賞します。

＜2＞候補者ノミネート
候補者をノミネートできるのは「放送人の会」会員に限ります。会員は、指定の用紙（本誌に同封）に候補者名、推薦理由を記入して事務局宛に返送してください。（誠に恐縮ですが、緊縮財政の折、郵便代のご負担をお願い致します）

グランプリ以外の賞については、候補者、推薦理由のほか賞の名称（奨励賞とか特別賞とか他

なんでも）も記入してください。

＜3＞ノミネートの締め切り
候補者ノミネートの受付締め切

鶴沼海岸から ③

名誉会長 川口 幹夫

ちょっと住み馴れた片瀬山から鶴沼へ引越した。同じ藤沢市内だが以前は山の上、今は海岸である。

「なかに、一寸した移動だから気持ちが変わるまい」と思ったのだが、それががらりと変わった。

山の上の暮しは、すべて見下して暮すようなところがある。目にふれるのもリスであったり、トンビであったり、相模灘の俯瞰図であったりした。今は相模灘は目の高さになった。引地川のはとりを通ると、バシバシ跳ねるのは鯉である。カモメも目の下を飛ぶ。

テレビで仕事をしている時も、この目線の高さが気になった。ついつい

りは三月八日（金）午後五時です。

＜4＞選考
賞の選考は選考委員会で行います。選考委員長は既にお知らせした通り川口幹夫さんです。他の選考委員は先の拡大委員会で推薦があり四人の方が内定しましたが、全員が確定してからオープンします。

今のところ、四月はじめに選考委員会を開催、発表と受賞は四月下旬の定例総会で行う予定です。

高いところから下を見下ろす気になった。テレビはやはり視聴者と同じ目線の高さがいい。

ただ、同じ高さと言っても、どんどん下げていって、いつの間にか妥協と馴れ合いになってしまふことがある。悪いことに目線を下げて行くとそれが当たり前で、下げ過ぎて馴れ合ってしまったことに気がつかない。

高いところにおいて低い目線が分かっている、低い目線でいてちゃんと高い位置を保っている、そういうことが、テレビ屋にとって何より大切だ。そう思ってもいつの間にか分からなくなる。だから、たまには居を移すことが必要だ。

——以上、山から海岸に移り住んで四ヶ月目の発見である。

過去は未来だ 「願・交・興・功」の会に

大山 勝美



ある新聞記者からの賀状に、こうありました。「番組のことを中心に精力的に取り組んでいるへ放送人の会」は、いまや貴重です。この会の存在は、少しずつ世間に認められつつあるようで喜ばしい限りです。とくに昨年後半の四つの催し「インタービー」「名作の舞台裏」「危機報道をめぐって」「木村栄文初ドラマを観る」は、それぞれ内容が充実して評判も上々でした。短い準備期間であったにもかかわらず、積極的に力を貸して下さった方々、御苦労様でした。心から感謝しています。

昨年の9・11アメリカ同時多発テロから客観報道のあり方、偏向報道、報道規制の問題もいろいろと考えさせられました。

脚本家の君塚良一氏は、9・11直後は、何を描くべきかの方向を見失って「もう書けない」と言

ってきたほどです。私も企画に関して、一時期判断停止状態でした。しかし立ち止まって、現在を思い返した過去を振り返るには、いい機会だったと思います。「願みる」ことは、決して懐旧ではありません。温故知新いや温故創新で、「過去は未来」なのです。

「願みる」は放送人の会々の基本線です。会の目指す事業は「願・交・興・功」だと考えます。

催しはいかに規模が小さくとも、これまで通り他の集団・組織と交わり、共催という形を取りたいと思います。

「交」のもうひとつの柱は、地方会員との積極交流です。「木村栄文初ドラマを観る会」の線を、継続していこうと、次なる具体案を練りつつあります。

「興」は興こすです。「名作の舞台裏」一・二回は、参加者から「とてもいい企画」と歓迎されました。ことしも、余力があれば新企画を試みたいと考えます。

昨年の夏ごろから、月一回の拡大幹事会を、土曜日の午後18時尾の「CORRIDOR」というバーで開いています。出席率は、それまでに比べて確実に上がりました。終わってからのアルコール付きの雑談が楽しいのです。幹事会にはオーブンですので、幹事以外の方も参加されているの提案をお待ちしてい

ます。

私事ながら、昨年2月入院・手術しました。優れた医師の技術、知己友人や家族の励まし、それに何か大きな力に支えられて、ようやく回復いたしました。が医師の曰く「無理せず」に。したがってスロウ&ステディのペースです。ことし会で新しく「功」の事業

『放送人の証言』経過報告

久野 浩平

昨年四月から十二月までに、

蟻川茂男（取材・堀川とんこう）
加藤静夫（元TBS照明、取材・大山勝美） フランク馬場（GHQ民間情報局員取材・鈴木昭典、石井清司） 大山勝美（取材・久野浩平）
橋本深（美術、取材・久野）以上5氏のV撮影を完了、今年の手初めは石井ふく子氏。東芝日曜劇場の成立秘話や「石井組」のあれこれに

触れていたたく予定です。

トータルでは作業開始以来、ほぼ三年間で三十人の方々の「証言」が記録されたことになりました。しかしプロジェクトの進行が遅々としていくことは否めません。これまでどおり取材対象者の選定、取材作業に参

が始まります。放送のプロが選ぶ「プロの創り手」を顕彰するへ放送人の会賞です。第一回目は誰か？興味はつきません。

以上のように当会はステディ&シュアリーの歩みを進めていきます。会員皆様方の、可能な限りのご協力を心から願って止みません。

加して頂きたいのはもちろんですが考えてみますと「放送人の会」の会員の大半が放送界の先達であり、放送史における被取材対象者でもあるわけです。

皆様はそれぞれに語り残して置きたい話題や意見をお持ちのはずです。とりあえず「このことについては是非とも語っておきたい」という積極的なご証言を歓迎いたします。

多様な発言の展開は、放送文化を多様な側面から見ることにもなり、立体的な理解の一助になるにちがいありません。ご希望のむきは事務局までご一報ください。



2001年の放送界掉尾を飾る イベント連打に話題集中!

折りしも民放誕生50周年に当たり、在野の立場から放送人の会の組織特性を活かしたコラボレーション・イベントが図らずも年末にどっと集中。かえって闘志をかき立てられ、各催しは盛況裡に終わりました……

・パネルディスカッション 『ミレニアム』の放送と私が創るドキュメンタリー (開催日時・01年11月15日 於日本コンベンションセンター) 幕張メッセ国際会議場 国際会議室) パネラー 岡崎栄(元NHK) 金沢敏子(北日本放送) 山崎裕(ドキュメンタリージャパン)。コーディネーター 今野勉(テレビマンユニオン)

以上の会員諸氏によるドキュメンタリーとその周辺をめぐる「私の」問題意識を中心に進められた。ハイテク最先端の機能を完備したコンベンション主体の会場だがアクセスがネックで集客が危惧されたが、今回はテーマとゲストの具体的な現場論が予想され、充実した集会となった。メディア志願の若者に限らずビジネス関連の参加者が多く、多メディア時代に模索する人々の姿が印象的であった、との報告があった。

・つぎに 『TVキャスターズレビュー2』 『米岡同時テロ・アフガン戦争報道を考える』 に触れたい。(開催日時 01年11月25日 於増上寺会館 撮影13:30~16:30 主催・放送人の会、LIVE実行委員会。後援・赤坂夜塾、グローバルネットワーク、創造支援工房FACET) 田原絵一朗、筑紫哲也、蟹瀬誠一のキャスター陣を揃え、ゲストに大島信三(月刊「正論」編集長)、篠田博之(月刊「創」編集長)、司会・石高健次(朝日放送報道部)。

9・11WTCなど同時多発テロをめぐるN・Y報道、その後のアフガン空爆および現地特派員報道についてさまざまな疑問や批判の声があがった。テレビのオンエア表現では見えない真相や報道現場の姿勢について大枠では当事者である各局ニューズワイド関係者、メディア関連の有識者を招いての集會。

約300名(有料参加者)の会場はほぼ満席で学生層に混じって熟年層の参加が目立ち関心の深さがうかがわれた。議論も活発でイデオロギ―論争ではくれない事態の歴史的背景、マスメディアによる操作のメカニズムなどテレビ画面では触れない本音が続出、充実した集会だった。

・『公開セミナー・名作の舞台裏シリーズ』 (主催・放送人の会、放送番組センター 後援・横浜市)

いわゆるテレビドラマ史上の名作研究といったものでなく、テレビドラマとその時代や人間、ドラマの本質をきわめようと、映像鑑賞をテキストにして関係者の証言を交えるといった、待望久しい企画が放送人の会という実践団体の手によって実現した。

第一回『岸辺のアルバム 77年TBS放送』 (11月30日13:30~16:30)。ゲスト・八千草薫(主演)、発言者・山田太一(原作、脚本) 鴨下信一(演出)、大山勝美(制作) 司会・今野勉。フィルムセンターのイタリア映画祭同様、前人氣沸騰し、放送センター側によれば5倍の応募者が殺到、抽選で入場者を決めたという。豪華メンバーもさることながら、

ら、同時代ドラマとして見る観客の熱い視線で場内はむんむんしていた。歌が世に連れなくなった今日、世に連れるドラマの可能性がいまみえたものである。

第二回『夢千代日記 81年NHK放送』 (12月22日13:30~16:30)。ゲスト・樹木希林(出演)、早坂暁(脚本)、深町幸男(演出) 司会・大山勝美。



(右から鴨下信一、山田太一、八千草薫、大山勝美の各氏)

(左から深町幸男、樹木希林、早坂暁)



「菊次郎はハナがあるでしょう」と旅役者に熱くなる芸者役の樹木さんの思いつき、薄幸な主人公に原爆禍を重ねた早坂氏、同時のドラマ作りを熱く語る深町氏……。第二回も大盛況裡に閉幕した。

創成期の混乱・模索の時代から、ドラマはカラー化の進捗にあわせるように傑作・佳作の連続ドラマが連打され、手だれの脚本家、円熟の演出家との出会いもあって、たしかに

「ドラマは世に連れ」の70年・80年代だった。本シリーズは02年も主要なイベントの一つとしてじゅっくり練り上げましょう。

・『中央で見られない問題作 ホットセツション』の打ち出しで始めたV作品試写会シリーズの第一回

RKB毎日50周年記念ドラマ
木村栄文監督『オールド・ディック』

(12月1日 於渋谷スタジオ14・00
16時)。ゲスト・木村栄文、コメディネーター・大山勝美。

ある深夜のこと。栄文さんは某会員の宅にTELを入れた。周年がらみの特別ドラマが「東京」にネットできない。理由は……ムニヤムニヤ。

要するに原作は洋物なんだが、ご当地博多に設定したスラップスティック風な喜劇仕立てで、と長電話。最初にして最後のドラマ作りなのだが、中央の反響も批判の声も知りたい。

そこで「放送人の会」で何とかできないか。「だったらとりあえずシブスタを確保しよう」(大山勝美)と話は早い。当日、栄文人気なのだろうか、珍しく会員の出席が良く、撮影スタッフ(役者のケーシー高峰など)も集合し、なんとなくプレビュー室の完成検討会の雰囲気。大山代

表幹事しきりで会員がそれぞれに友情に満ちた感想を語る……。後日事務所にFAXで送ってきた会員もいた。

「木村さん、三國(連太郎)さんさんが素顔で楽しんでましたね。千利休だろうと釣りがバカだろうと、設定された役を越えて奥行きを創り出す三國さんが、ここでは、繊細なはにかみ屋の生身の奥行きを見せてくれました。ラストの情景は印象的でした。かつて切ない末期の目で、白いブラウスをはためかせる自転車乙女を眺めていた「大病人」が、ここでは、未練たっぷり博多の娘さんの後ろ姿を眺めていました。

お互いに元気に老いましょう！」
以上が田原茂行氏のFAX。
逆ネットやクロ送りが困難な時代で(デジタル化ソフト開発の気運もあり)今後もうこうしたローカル局の試みの受け皿としてプレビュー・イベントの定着化も視野に入れたい。

日本女性放送者懇談会(SJWR)との共催企画『テレビは何を伝えたか』松本サリン事件の報道から(02年1月26日於渋谷スタジオ) V上映『テレビは何を伝えたか』

ゲスト・河野義行(報道被害者) 司会・迫田朋子 NHK論説委員

「ドラマは世に連れ」の70年・80年代だった。本シリーズは02年も主要なイベントの一つとしてじゅっくり練り上げましょう。

「中央で見られない問題作 ホットセツション」の打ち出しで始めたV作品試写会シリーズの第一回 RKB毎日50周年記念ドラマ 木村栄文監督『オールド・ディック』 (12月1日 於渋谷スタジオ14・00 16時)。ゲスト・木村栄文、コメディネーター・大山勝美。 ある深夜のこと。栄文さんは某会員の宅にTELを入れた。周年がらみの特別ドラマが「東京」にネットできない。理由は……ムニヤムニヤ。 要するに原作は洋物なんだが、ご当地博多に設定したスラップスティック風な喜劇仕立てで、と長電話。最初にして最後のドラマ作りなのだが、中央の反響も批判の声も知りたい。 そこで「放送人の会」で何とかできないか。「だったらとりあえずシブスタを確保しよう」(大山勝美)と話は早い。当日、栄文人気なのだろうか、珍しく会員の出席が良く、撮影スタッフ(役者のケーシー高峰など)も集合し、なんとなくプレビュー室の完成検討会の雰囲気。大山代

SJWR T会長)

松本美須々高校生が制作(東京V フェスティバルでグランプリ受賞) したドキュメントを見、渦中の河野氏を招き、当時の報道取材をめぐる論証、問題は解決したのか、放送界の現状について活発な意見交換があった。会のインキュベーション機能を発揮したイベントであった。(文責 編集部)

メールアドレスについて

「放送人の会」のメールアドレスは現在題字下にある通り hosojin@abeam.ocn.ne.jp を使っています。 前の info@hosojin.com は使えないわけではないのですが、このアドレス宛に最近ウイルスに汚染されたメールが頻りに届いていて、使いたくないのです。ご協力をお願いします。

新会員編

露木 茂氏：アナウンサーの重鎮？ちがう。ダンディーなソフットが似合う「濱岸」の紳士？近いがちがう。ジャーナリズムを肩からせて語る人でなく、映像を着に語る通人です。そう思いませんか。(松尾)

ルスホール。故人が総合プロデューサーとして心血を注いだ室内楽専用ホールだ。葬儀は萩元夫人との合同葬で音楽葬の形をとることにしてテレビマンユニオンは創立以来初めて全社をあげて葬儀の式典という未知の領域に踏み込んだ。代表の重延が葬儀委員長として司会と統括に当たり、式典構成、運行、総務、広報に分かれて当日はほとんど全メンバーがそれぞれ役割で参加した。私は彼との付き合いが長かったせい「葬儀」をつくるという重い役割と向き合った。

当日の夜、ホールの二階席前方の萩元さんの定席には愛用の帽子、ボルサリーノの赤がスポットに映えていた。葬儀の終わり近くに重延の発案でその席に向かつてその夜初めての拍手が参列者のスタンディングオベーションでいつまでも続いた。

そしてすべてが終わって残ったのは「ああ今夜もプロデューサーはハギサンだった。」という強い思いだった。生前、萩元P、私がD、という仕事が多かったがこの夜ほど萩元さんの見えざる采配の手を感じた事はなかった。

月間ただ一日のホールの空き日と小澤征爾さんただ一日の可能性が奇跡のように合致した事に始まりすべての進行の細部に萩元さんの目線が生きていた。

プロデューサー萩元晴彦は、最後の仕事でも人々の記憶に長くとどまることになった。

日韓船上シンポジウム

村上 雅通

昨年11月18日、釜山と博多を結ぶフェリー船上で、日韓のテレビドキュメンタリー制作者80人が集いシンポジウムを開きました。テーマは「歴史から未来へ」メディアからの提言。日韓交流の原点と言える玄界灘で、両国にまたがる歴史や現状認識の違いを語り合い、今後の交流のあり方を模索する試みです。日本側から、RKB毎日放送の木村栄文氏など3人、韓国側からKBS、MBCの報道番組プロデューサーなど3人がパネリストになり、取材体験を元に本音をぶつけ合いました。歴史教科書や小泉首相の靖国神社参拝問題がクローズアップされた直後だっただけに緊迫した論議が展開されましたが、その中から浮かび上がったのは日韓制作者の視点の明確な相違でした。「共通認識は不可能。私は、伊藤博文にも彼を暗殺した安重根にも愛着を感じる。個人には矛盾が存在する。一方的に愛国的な立場ではなく、

もつとやわらかい視線でとらえてほしい」(木村栄文氏)に代表されるように、あくまで個人の思いをスタートラインに据える日本側に対し、韓国パネリストからは「従軍慰安婦の問題以外にも、歴史の埋もれた事実はある。それを確認することなく一個人に目を向けることは、歴史から目をそむけることにつながる」といった意見が相次いだのです。

論議の平行線が続く中で、アジアプレス代表野中章弘氏の発言に会場は静まり返りました。カンボジャ、東ティモール、アフガンでの内戦の取材体験を元に、「ベトナム戦争で韓国軍は虐殺事件を起こしている。戦争では、被害者が加害者に転じることもある。過去の問題を日韓だけで論じることには疑問を感じる」と指摘し、広くアジアの視点から問題を捉える必要性を訴えたのです。会そのものの意義にまで踏み込んだ野中氏の発言に対する具体的な解答を引き出すことはできませんでしたが、韓国側パネリスト鄭秀雄さんの「我々ドキュメンタリストは、固定観念や先入観を一切排除しなければならぬ」という持論は、解決の糸口になりそうです。

4時間余りにわたる討論で「具体的な未来像」を描くには至らなかったものの、参加者たちは日韓新時代に向けた序奏を確信し、一

年後の再会を誓いました。

新刊紹介

吉永春子著 『七三一 追撃』
そのとき幹部たちは……

(筑摩書房 一六〇〇円)

ラジオ時代のいわゆるダンスケ時代だった。5キロにちかい武骨な物体を担ぐ女性たちがいた。もの珍しかった。「あれが噂のお春さんだ」と鍛冶橋クラブのデスクが新入りの私にアゴで示した。「ラジオ・スケッチ」(台湾独立派、全共闘の内幕……など)を経て映像ハンターに。

「帝銀事件」「松川事件」、そして本書の「七三一」をターゲットに彼女は猛然と走った。いや今も走り続ける……。「伊達や酔狂ではない」という慣用句があるが、彼女の存在感、伊達や酔狂じゃすまない。だって、この本も走っている。功なり名遂げた人の、よくある青春回顧のナルシズムの書ではない。現在進行形の、ダイナミックで骨太い執念の文体が射程距離に獲物を追い詰めるのはなに故か。生物兵器、彼女の目指す方向に文明の退廃に加担したものが今うごめいているのだから。

(松尾)

マイおんえあー

『インターネットデイベート』

坂元良江

『インターネットデイベート』という番組をやっていると言うと、インターネット上にたくさんあるホームページの掲示板への意見書き込みのやりとりやチャットのことと間違われます。

ところがこれがテレビの番組なのです。NHK B S 1で昨年4月から始まりました(毎週土曜日の午後11時から放送しています)。

番組名のホームページに前もってテーマを載せ、意見を募ります。テーマは少子化問題、大学改革、ゴミ問題、夫婦別姓からアフガン復興に何ができるかで、広範囲にわたりホームページ上でまずは活発な意見交換が行われます。

この9ヶ月間に3000人を越す人々が投稿をしてきています。それがみな、レベルの高い議論なのです。自分の意見を表明し、議論する場を欲しいと思ってる人は意外に多いのだということはこの番組ではじめて知りました。

ひとしきり議論が続いたところで番組制作は行われます。投稿者にカメラの前で意見を述べてもらい、反論する人にも登場してもらいます。投稿者の情報や問題提起で取材をすることもあります。ホームページの画面を写し、たくさん投稿をスタジオで紹介もします。

スタジオにはテーマ毎のナビゲーター、進行役のアナウンサーがいて毎回立場の違う討論者二人がデイベートするという番組です。3週連続同じテーマで継続討論し、3週目は生放送、生でメール投稿が紹介されます。投稿意見はデイベートする人の応援だったり、鋭く切り込むものだったり、さまざまです。

インターネットとテレビ、一見相いれない、むしろ反対の性格を持つメディアが割りにすんなりと一つになることに実はびっくりしています。番組スタートの頃はインターネット上の意見は匿名性があるからこそ書けるものでテレビなどという公の場に引っぱり出すものではないのでは、との意見も多かったのです。

26、7年前に『対談ドキュメント』という番組をテレビ朝日で放送しました。永井道雄さんと野坂昭如さん

が教育を論じたり、田英夫さんと河野洋平さんが政治改革を唱えたり、森繁久弥さんと松下幸之助さんが人生を語り合ったりといった有名人対談でした。

私のトーク番組好きはその番組を担当した時からです。最近もNHK B S 討論を6年間プロデュースし、一昨年は『小田実対論の旅』正義の戦争はあるのか』で小田さんにアメリカ、ドイツの政治家や知識人、平和運動家と戦争を論じてもらいました。それらはいずれも著名なオピニオンリーダー的な方々の意見や話を聴くものでした。それに比べますと『インターネットデイベート』は普通の人々がまず意見を言い、それを発展するかたちでテーマに即した専門家が討論するものです。専門家は必ずしも有名人である必要はありません。番組が放送された後もホームページ上で討論は継続します。インターネットというメディアと一緒にすることでテレビの討論番組がずっと、ずっと身近な日常的なものになっていきます。

現代用語の基礎知識

(不自由国民社刊)

つかみ 「おまえさん、つかみ

みが下手だっただよ。こうやって(どしなを作って)ねえちよいと、オマイさん、お前さんじゃないよ」と黒門町は弟子を鍛えた。昨今ではテレビ界のつかみとは、専ら吉本関連の木っ端タレントによるバラエティー番組の視聴率の数字の気配に絞られる。

事件待ち ワイドショーは「曜日担当」の某プロダクションのCPが「なんかネタはねえのかよ」が口癖。「ありました! おおアリのコンコンチキ」とアルバイトの兵隊のひどりが喚く。「そりゃなんだい。言ってみな」とCP乗り出すと「デバ地下迷子の探し方てえのはどうでしょう。ヤンママに受けまっせ」「だめだめ、オタクコナス。もっと生きのいい事件はねえのかよ」と。

コーナー C M 4 連か6連に挟まれたミニ番組を言う。昔のコーナーとは六畳一間でミカン箱を机代わりした感心な息子の居場所を指した。コーナーが評判を呼ぶと「企画もの」に出世する。



ラジオ語ルシス

木村成忠(東北放送)

去年十月一九日、横浜市の放送番組センター内放送ライブラリーで開催された「平成ラジオ塾」(主宰・島地純、山県昭彦ほか)主催・第六回ラジオ制作研修会「コンクールで鍛えようラジオのちから」の講師としてお招きいただいた。私が企画制作し、第27回放送文化基金賞の本賞および音響効果賞を受賞した「秘められた十字架」唱歌120年の謎」を教材のひとつとして取り上げてくださったのである。

スキルアップを自らに課して研修会にのぞんでいる各局若手ディレクター諸君の真摯な姿に、映像優位がいまこそ、音声も豊かな表現力を持つことを実感してもらい、その制作作法を伝えて行くことの大切さを痛感した。

その翌日、横浜山手のフェリス女学院周辺と外人墓地を訪れてみた。墓地は幸運にも一般公開の日に当たっていて、フェリス女学院の創立者メ

アリー・E・キターの墓碑を礼拝することができた。キターは「秘められた十字架」にも登場するアメリカの婦人宣教師で、一八六九年(明治二)に来日、日本人に賛美歌を普及させようと尽力した人物である。

実は、幕末から日本で布教を始めた最初の宣教師たちは、日本人はみな音痴で賛美歌を歌わせることは到底できないと絶望していた。ところが、キターはその絶望が間違っていることを発見する。日本人は音痴ではないし、西洋の歌もきちんと歌えることを実践を通して証明していった。「私は少女たちに行くつかの賛美歌を教えました、その歌い方は見事です。まだ幼い子も、非常に澄んだ声で上手に歌います」と語り、日本人はファとシの音を除いた五音音階(いわゆるヨナヌキ音階)の歌なら音痴にならずに歌えることを体験から知り、それを賛美歌普及に活かして行った。

いま、私の中で平成ラジオ塾を設立し、ラジオディレクター育成に力を注ぐ方々とメアリー・E・キターたちの姿が重なって見える。

「自分は番組でどんな歌を歌いたのか、どんなうたが歌えるのか、

よく歌うには何をしたらいいのか」、それを自覚してもらうことが制作マン育成の重要なポイントであろう。研修会から帰り、私は社内制作

研修の準備を始め、十一月半ばに一回目を開催した。キター女史のように絶望も失望も当分封印することにして。

そろそろ二月。花札では梅に鶯の絵が描いてある。この取り合わせはやはりおかしいのではないかと疑問を昨年TBSの天気予報の森田さんが提起していた。

梅の咲く時期は品種と場所でいろいろで、「枝ごとに梅には花の遅速あり」と言われるのだが、早いものでは一月に咲き始める。熱海の梅園は一月十五日から恒例の梅祭りである。東京の梅はぶつう二月には咲くと思つていいだろう。とこ

ろがウグイスは二月にはなかなか鳴かない。「ホカホケキヨ」と

梅に鶯



美しい声を聞くのは早くて二月末、普通は三月に入ってからである。つまり梅の花の時期にウグイスは鳴かない。あれはウグイスではなくてメジロの間違いではないかというのである。調べてみると梅にウグイスの取り合わせは平安時代に中国から輸入されたもので、絵も同時に入つて来たらしい。中国のウグイスは日本のウグイスとは品種が異なるコウライ

ウグイスである。巢の形をはじめ習性かなり違い、一月に鳴き始める。中国では梅にウグイスの取り合わせはごく自然のことなのだ。江戸時代の百科事典と言われる「和漢三才図会」ではこの時期のずれに気がついていて、中国ではウグイスは一月に鳴き始める」と紹介しているが、コウライウグイスとまでは気がついていない。

野生ウグイスは汚れていてほとんど茶褐色にしか見えないが、飼われていたウグイスはしよつちゆう水浴びをしていわゆる鶯色である。メジロには名前通り目のまわりにはつきりした白い輪郭があり、花札だからといって絵描きが描き間違えるはずはない。しかし、こんな考証はあまり意味がなく、視聴者から「うちの庭の満開の梅でウグイスは鳴きました」という多数の葉書が来て森田さんの疑問は何処かへ行つてしまった。

(視郎)

リレー放送現場史

出逢い触れあい別離のドラマ

山本隆則

なんだかラブストーリーめいた題名だが、出逢いといえば、誰しも心に思いたたる節の、一つや二つ、おもちに違いない。TV演出という仕事を通じて、先輩とご縁のあった俳優諸氏との忘れ難い触れあいをちょっぴりご披露しようと思います。

水谷八重子（初代）すでに物故された日本の代表的名女優・・・KRT時代にぼくがたまたま担当した、室生犀星原作、金子洋文脚本『兄いもうと』が最初の出逢いであった。

NET（現テレビ朝日）へ移ってこ縁は多くなり、田中亮吉先輩が、やはりラジオ東京からNETへ移籍されていて（八重子さんの所属する劇団新派の元芸芸部に在籍されていた関係から）TVではNET専属俳優という契約を果たしておられたというわけである。先輩に遅れてNETに移籍を果たした小輩の第一作は、前記『兄いもうと』で、スタジオの広さもあって美術も入念でゆきとどき、スタッフ・キャスト

ともどもゆとりあるドラマを作ることができたというわけである。

そして忘れ得ないドラマを挙げれば、久保田万太郎先生のオリジナル、しかもアトにもサキにもテレビドラマはこれしかない唯一のもの。『ごぞごぞとし』でのご隠居役はまさに絶品であった。彼女のほかに、山田五十鈴、杉村春子も共演した一時間ドラマで、NHK「紅白歌合戦」と同タイムで挑戦したことを鮮やかに記憶している。

山田五十鈴 いまもご健在の、歴とした名女優・・・『ごぞごぞとし』に於いて、またとない清元の音締めとのどに、東の間陶酔させられたが、なんといつても有吉佐和子原作、成澤昌茂脚本『香華』の郁代である。この役こそ彼女のために書かれたといっても過言ではなく、まこと出色の演技であった。『香華』は、いまでも舞台上で繰り返し上演され、五十鈴十種の一つになっている。

森雅之 知る人ぞ知る、大正の文豪、有島武郎の御曹司である。はじめてのご縁は、水谷さん同様、『兄いもうと』であったが、小生にとっては、はじめての芸術祭参加作品『傷痕』（高橋玄洋、大垣肇脚本）の主演を煩わし、お陰で小生にとっても、また会

社にとっても初の芸術祭奨励賞作品になり得たこと、またテレビ記者会賞奨励賞受賞作『いのちある日を』（高橋玄洋脚本、28回）でも出演されたことは生涯忘れないだろう。

森繁久弥 この人との出逢いは古い。忘れもしない、戦後も間もない、日劇小劇場の舞台と客席であった。ぼくが客席で、彼は、菊田一夫作、岡倉古志郎演出の『非常警戒』の舞台上であった。彼は、満電アウンサー出身の当時まだ無名の俳優に過ぎなかったが、軽妙洒脱にして斬新ユニークな演技は、当時から端倪すべからざるものを秘めていた。案にたがわず俳優というイメージを大きく塗りかえたばかりか、今日われわれが知る彼の存在感をみれば、多くを語ることはあるまい。

仕事上の出逢いは、里見惇原作・脚本の『父親（てておや）』であった。山田五十鈴、朝丘雪路らが共演したが、森繁と山田による大阪弁の凄絶なやりとり・・・酔ったまぎれに呻る義太夫節・・・言い尽くせぬ妙味を遺憾なく発揮したものである。

月日はさらに流れ、テレビ朝日をリタイアするべく待っていたのは、彼の所属するプロダクションであった・・・

呵々

轉聲塵語

インキュベーションって何？

◆子供の遊びに卵たてがある。ペー
ジュ色の光卵卵が比較的的成功し、6
200円の値崩れ卵は厄介だ(?)。
艦長コロンブスがゆで卵を潰して簡
単に立てたらアンフェアだ、と怒鳴
たヤツがいたという一席はあまりにも
有名な逸話◆日本国にも高度成長期
には「金の卵」というヒト科ゴクツブ
シ類という未熟卵がうじゃうじゃ生息
したものだ。武田鉄矢は「いや卵では
ない、あれらは腐ったミカンなのだ・・・」
と言った(連ドラ『3年B組 金八先
生』TBS)◆産婦人科のさる医局員
の実家が卵生産農家だった。卵を孵す
巨大なインキュベーターが人間にも応
用できないだろうかと考えた。かくて
産婦人科医院に大量に発注され、ママ
の体温は不要になった◆アメリカ80
年代にはベンチャービジネスが開花した
が事務所賃がバカ高い！だったらラ
ン・システムを内蔵したインテリジェ
ントビルに事務所機能を一本化したら
どうか。ベンチャーカンパニーが一コ
ずつ事務所(と人件費)を抱えるのは
いかにも不経済だ。かくてインキュベ
ーションなる事務所代行業が大ブーム
になった◆この指とまれ式に世話人は
立候補して多彩なイベント・セミナー・
フォーラムを自在に開催するのが特色
の『放送人の会』はさしあつたて自然
発生的インキュベーション団体なので
ある◆今年はどうな催しや研究プロジェ
クトをインキュベート(孵化)させて
やりましょうか。
(鶯歌蝶)

某月某日……

現場発

松平定知

今年初出勤の日、いつもの癖で早にNHKの廊下を歩いていると、

4人の方から呼び止められた。紅白での阿部、有働阿部の、初々しくも、澆刺とした司会ぶりを誉めてくださるのである。同じ趣旨の電話も私の机上で何回か鳴った。嬉しかった。某ディレクターも、この日、廊下でそんな声をかけてくれた一人であるが、ひとしきり誉めたあと、氏は「ところで一度、スタジオに見学に来て下さいませんか」と言う。

「何こと？」と問う私に、氏は「ウチのOOアナは、台本に書かれた自分のしゃべる箇所のコメントを、そっくりそのまま、一語一句違えず模造紙に大きな字でFDに転記させ、本番では、それを読んでいるのだが、いまは、そうやるもんなのでしょいか」と言うのである。突然スタジオに行き、本番直前のアナウンサーの心緒を乱れさせてはいけないし、もとよりそのアナウンサーに恥をか

かせるのが氏の本意ではないのだから、後日、私は氏と一緒に、ひっそり、副調整室に入った。

なるほど、件(くだん)のアナウンサーは、カメラの横にFD氏を立たせ、彼が広げた模造紙に向かってにこやかに語りかけていた。

プロンプターがいつからニューススタジオに導入されたか、詳しくは知らないが、私のニュース時代の「机に置かれた原稿がそっくりそのまま目の前に映し出される装置」が嫌いだった。上手に使わないと、それは極めて不自然なものになるからである。たとえば、総理大臣の長い談話があったとする。目の前のカメラには、その談話が延々と、そのまま字となって写っている。じゃあ、その文字を見つめ続けて読めばいいかという、そうはいかない。役者さんが劇をやっているんじゃないのである。普通の人間は、他人の言ったことを、全部、ソラで覚えていられるわけがない。他人が喋った内容を、「カメラに向きっぱなし」で紹介するのはひどく不自然であることに、まず、気づかねばならない。

この場合、私は「原稿用紙」を、わざと、カメラに写るように机から持ち上げて、それを読んだ。これは使用上の注意のごく一部だが、要するに、「考えなし」でプロンプターを使っていると、目の上げ下げや原稿をめくる腕の動きなど、普通の人の普通感覚を喪失してしまう。そればかりではない。この便利さに慣れてしまうと、今度はそれ無しだと不安で一語も発することができなくなってしまふ。だから、プロンプターのないスタジオに行く「模造紙」になるのだ。一見便利に見えるこの機械も、実は諸刃の刃なのである。

持ち上げて、それを読んだ。これは使用上の注意のごく一部だが、要するに、「考えなし」でプロンプターを使っていると、目の上げ下げや原稿をめくる腕の動きなど、普通の人の普通感覚を喪失してしまう。そればかりではない。この便利さに慣れてしまうと、今度はそれ無しだと不安で一語も発することができなくなってしまふ。だから、プロンプターのないスタジオに行く「模造紙」になるのだ。一見便利に見えるこの機械も、実は諸刃の刃なのである。

編集後記

◆『千年の恋』(東映)。源氏物語絵巻を動かしたらかくや！堀川とんこうさん、目の保養になりました◆『逃亡』(NHK)は、まさに市川崑監督の映像美学！音楽、タイトルバック、役者良し。松前洋一さん、ごっつあんでした◆切った張ったはヤクザの世界ですが、会報も号を重ねるにつれ、ヤクザがいの切り張り作業に慣れ、長屋の傘張り浪人ばりの編集部。玉稿打ち込む作業に疲れると、発句でもやりますか。◆大寒や 飲み屋恋しくキー叩き。大寒や プリントアウト酒うまし(馬笑)大寒や フルートの音も凍りけり(雅浩)◆新刊紹介、てなほどの代物ではありませんが「TBS新・調査情報」連載をまとめ、題して『テレビドラマを「読む」』近日発売。「面白くてダメになる本です」(松尾)。◆ホームページの開設が遅れています。伊藤雅浩の悪戦苦闘の甲斐あって2月初旬にはスタートの予定◆次号は4月か、五月の腹づもりですが、さて……

(編集 伊藤雅浩・松尾羊一)